

校長 橋本 忠

いよいよよまよめの時期となりました。 来年度さらに「学び合い やり抜く 栄中生」を目指して

平成25年度も残すところ3か月となりました。いよいよ今年度のよまよめの時期となるとともに、平成26年度の教育活動の計画をつくる段階になってきました。

先日、校内において学習委員会主催で「百人一首大会」が行われました。全校生徒がいくつかのグループを作って多目的室に広がって、読み手に合わせて札を取っていきました。和気藹々とした大変和やかな雰囲気でした。小さな取組ではありますが、全校生徒が一堂に会して一つの活動に取り組んだ「栄中ならではの活動」であったと思います。

「栄中の良さとは何か」と考えたとき、全校生徒が一丸となって一つの活動に取り組むやすい、生徒一人一人が活躍できる場が設定しやすい、全職員で全生徒を指導していくことができる、一人一人の生徒の良さや活躍を見届けやすい、保護者・地域の皆様の温かな目に見守られているなど、小規模であるからこそその良さがたくさんあると思います。



保護者や地域の皆様にお願ひしました学校評価においても、お褒めの言葉や課題・問題点など、本当にたくさんの御意見・御感想をいただきました。ありがとうございました。皆様から頂いた貴重な御意見を参考にしながら、学校教育目標『学び合い やり抜く 栄中生』を目指して、来年度のより良い教育計画を作成していきたいと思ひます。今後とも様々な面での御支援御協力をよろしくお願ひします。

リサイクル活動 ご協力ありがとうございました。

1月11日(土)に、本年度3回目のリサイクル活動を実施しました。1・2回目と同じように、たくさんの新聞紙・段ボール等が集まりました。保護者・地域の皆様、本当にありがとうございました。収益金104,444円については教育活動に有効活用させていただきます。



「いたわりの気持ちの訓練」

冬休み明けの1月6日(月)の全校集会での話

皆さんも今までにたくさんの人達から「いたわり」の言葉や「思いやり」のある行動をしてもらった経験があると思ひます。他の人から「いたわり」の言動をいただいたときには心が温かくなりますよね。歴史小説家の司馬遼太郎さんがこの「いたわりという感情」について書いています。(以下引用文)

…私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。……中略……

自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることに言ってもいい。やさしさに言いかえてもいい。「やさしさ」「おもいやり」「いたわり」「他人の痛みを感じることに」みな似たような言葉である。これらの言葉は、もともと一つの根から出ている。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならない。その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分で作りあげていきえすればよい。この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるにちがいない。…※

いたわりとか思いやりという気持ちは練習しないと身につかないもので、思いやりのある人間になりたいと思ったら、その訓練を積み上げるしかない。改めて考えさせられる文章でした。…

※ 司馬遼太郎氏の「21世紀に生きる君たちに」から引用